

建築家V.スカモッツィのウィトルウィウス建築論の受容について

下川 勇*

ON THE RECEPTION OF VITRUVIAN ARCHITECTURAL THEORY IN VINCENZO SCAMOZZI ARCHITECT

Isamu Shimokawa

This paper is a study on the reception of Vitruvius (De Architectura) of the architect, architectural theorist Vincenzo Scamozzi in Italian Renaissance. The architectural theorists of the Italian Renaissance requested the authority of the architectural thought to Vitruvius by the taste of the Humanism. Scamozzi also was belonging to such a tradition, he wrote the architectural books "*L'Idea della Architettura Universale*", while was complying with the architectural thought of Vitruvius. Therefore, in this paper we make clear the points that Scamozzi is relying on Vitruvius, that he was constructing the original thought of architecture, while deepening the architectural thought of Vitruvius.

Keywords: V. Scamozzi, Vitruvius, architectural theory, Italian renaissance

1. はじめに

ヨーロッパ建築界で脈々と受け継がれてきた古典主義建築理論、その始祖とされるウィトルウィウス (Marcus Vitruvius Pollio, BC.80 頃-BC.25 頃) の遺著『建築十書 (De architectura)』が後世の建築家に伝えた数々は、建設以前の哲学思想から建設行為に至るまでの総合的な建築プログラムである。建築が哲学思想を伴いながら制作行為を行う分野であるとされる所以は、まさしくウィトルウィウス建築論による。そして、本稿で取り上げるイタリア・ルネサンスの建築家・建築理論家ヴィンチェンツォ・スカモッツィ (Vincenzo Scamozzi, 1552-1616) についても、その建築理論はウィトルウィウスに由来するとされる。彼と同時代の歴史記述家ロドヴィーコ・ロンコーネは「我々の時代のウィトルウィウス」¹⁾とスカモッツィを評した。事実、スカモッツィは自ら著した建築書『普遍的建築のアイデア (L'Idea della Architettura Universale)』(Venezia 1615、以降『アイデア』と表記)において、「ウィトルウィウスが言うように・・・(come dice Vitruvio...)」とその名を挙げ、引用を繰り返すのであった。

* 建築学科

様々な論点でウィトルウィウスに依るスカモッツィではあるが、しかしながら『アイデア』にはウィトルウィウスに傾倒依存していない箇所が幾つか見られるのも、また事実である。一例を記すと、ウィトルウィウスがピュテオスを否定的に論じている場面²⁾に対してスカモッツィは、ピュテオスがプリエーネのミネルヴァ神殿を計画した上、さらにその詳細を書き留めた人として称賛に値すると述べ、「それゆえウィトルウィウスはピュテオスをそれほど痛烈に批判するべきではなかった」³⁾と独自の見解を述べている。つまり、スカモッツィは確かに同時代人にウィトルウィウスの再来と言わしめるほどにウィトルウィウスに依っていたが、それは盲目的な受容ではなく、正しく自らの批評をも加えたオリジナリティのある受容の仕方をしていたと考えられるのである。

イタリア・ルネサンスの建築理論家は、その人文主義的趣向からウィトルウィウスに建築思想の典拠を求めた。このうち建築のオーダーに関する論考を主体的に著した理論家も見られたが、ウィトルウィウスの偉業を引き継ごうとする、とりわけ建築思想・建築理論を強調して十全な建築書を著そうとした理論家も少なからず存在した。スカモッツィは後者に属する建築理論家と見なされているが、その様相については未だ明らかにされていないところが多い。本稿では、このようなスカモッツィのウィトルウィウス建築論の受容の様子を、「ウィトルウィウス研究の意義」、「建築書の構成内容の比較」、「ウィトルウィウスの教義に対する依存と深化」という3つの視点から確認していきたい。

2. ウィトルウィウス研究の意義

スカモッツィのウィトルウィウス研究は、ダニエーレ・バルバロ注解『建築十書 (I Dieci Libri Dell'Architettura)』(Venezia 1567)を用いて22歳の時に行われた。その最後の頁にはウィトルウィウス研究の意義を述べた覚書が認められている。

「アクイラの優れたパトリアルカ、ダニエーレ・バルバロ猊下によって注解されたウィトルウィウスを精読することを、努力のすえ、ついにはヴィチェンツァのヴィンチェンツォ・スカモッツィ自らの力で成し遂げられた。これは3度にわたって行われ、特筆すべき事柄の全てを書き留めつつ行われた…。これは1574年の4月4日から始められ、今日1574年の7月2日に成し遂げられた。言うなれば1度目は朗読を聴いていた。2度目はZoppinoの解説(筆者註:詳細不明)を用いず朗読を楽しんだ。そして今日3度目には、それを批評した。私は苦労を省みず価値ある成果を望む人に、これが如何に受け入れられるべきものであるかを知った。私は、彼が論じた建築の最も難しく必要に迫られた問題や建築家への要求を確認しながら、あらゆる研究をこれに位置づけていきたいと考えている。このことを仮に多くの人々が理解しているならば、彼に依存していることを僅かでも知り得る建築家として、簡単には慢心することはないであろう。ヴィチェンツァのヴィンチェンツォ・スカモッツィ。」⁴⁾

ウィトルウィウス研究は3度にわたって行われている。1度目と2度目は朗読であり、通読することによって『建築十書』の内容を把握する作業であったと見ることができる。しかし3度目

には『建築十書』を批評し、「建築の最も難しく必要に迫られた問題や建築家への要求」を見出して、建築に関するあらゆる研究をウィトルウィウスに基づいて行っていく意志を表明している。スカモッツィにとって、このウィトルウィウス研究は大変意義のあるものであったと考えられる。それは、スカモッツィがこの研究において抱いた意志を終始貫いているからである。本稿第4節では、同時代の建築理論家としては極めて異例の議論を執拗に展開している内容を見ていくことになるが、これこそは「建築の最も難しく必要に迫られた問題や建築家への要求」という命題にスカモッツィが向い合った結果なのではないかと考えることができる。

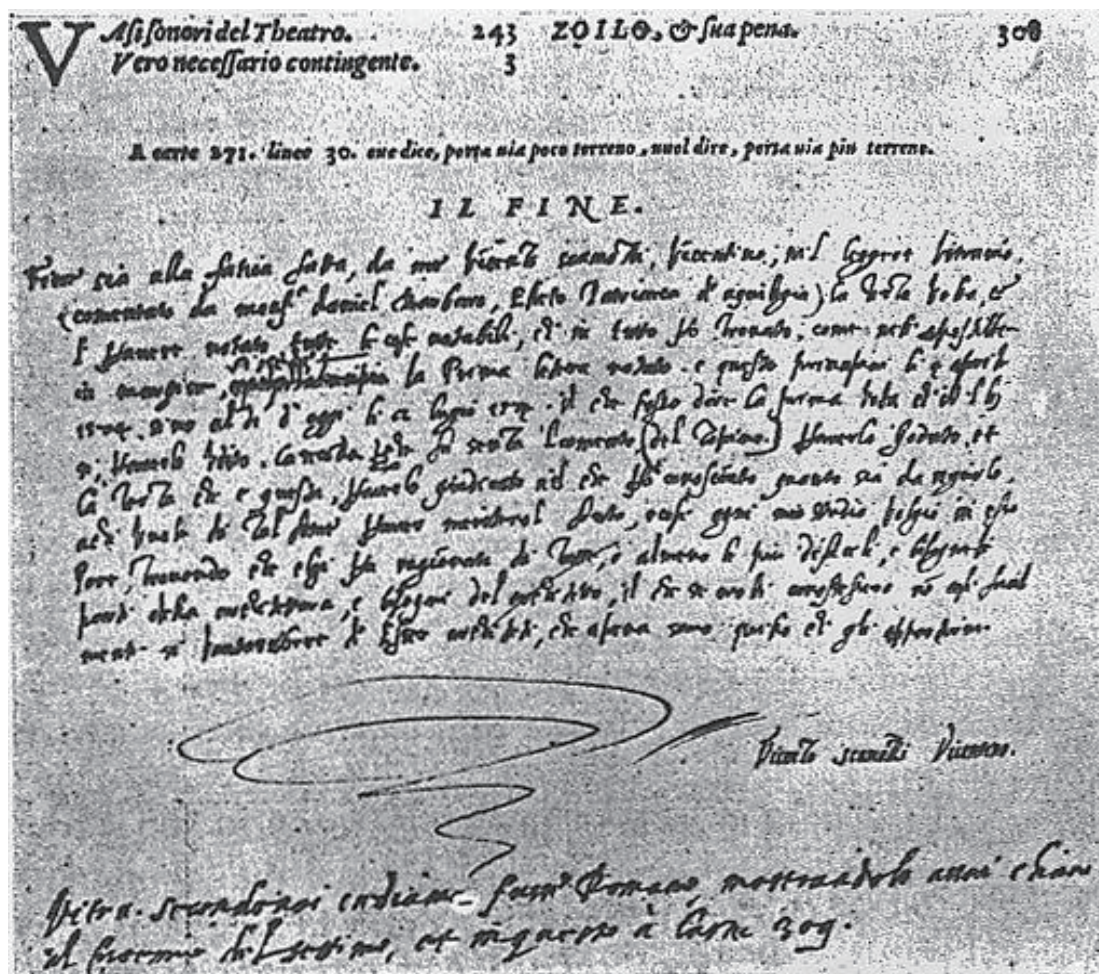


Fig.1 ウィトルウィウス研究の覚書

3. 建築書の構成内容の比較

ここで、ウィトルウィウスとスカモッツィの建築書における各書の構成内容を、それぞれの目次を通じて比較する。この考察によって、ウィトルウィウスに基づいた『アイデア』の性格が明らかになるであろう。

ウィトルウィウスの建築書の目次構成については既存の邦訳書⁵⁾を参照し、要点を損なわないように簡略化して示す。スカモッツィの建築書については以下のことに留意する。当初『アイデア』は10書構成の予定であったが、最終的には第1, 2, 3, 6, 7, 8書の6書構成に縮小されている。

残りの4書分については『アイデア』の冒頭に僅かに述べられている内容を参照し⁶⁾、既存の6書分と合わせて示す。ただし、既存の6書分については各書の目次を参照することにより、より正確な情報が得られるが、しかしながら、あまりにも膨大な頁を要することになるので、ウィトルウィウスの場合と同じく、その主旨を損なわない程度に簡潔にその目次を要約してあらわすことにする。

<ウィトルウィウス>

- 第1書 建築・建築家の定義、動物の身体構造と土地の健康性、城壁と塔の構造、建築の割当、悪気流を避けるための配置
- 第2書 家屋の起源、万物の元素・原料・素材
- 第3書 神殿の構成要素・形式・柱間形式の種類
- 第4書 オーダーの起源・種類・柱上部の装飾、神殿へのオーダーの適用
- 第5書 公共建築の種類・構成、港
- 第6章 気候の影響、住家の構成要素と配置、ギリシャの住家、基礎工事
- 第7書 壁の構造と装飾、壁画とその原料
- 第8書 水脈探査、水や温泉の性質、水を引く方法
- 第9書 天空と惑星、占星術、日時計の原理・使用法・発明の由来
- 第10書 機器（メーカネー）の起源・必要性・種類・用途

<スカモッツィ>

- 第1書 建築の起源と変遷、建築家の能力、古今の著名な建築家の論議と作品、建築家の名声と報酬、建築家と施主と親方の関係、建築工事の諸経費
- 第2書 敷地の性質と種類、港、環境の種類・性質・変化・影響（日時計）、要塞の形態と配置
- 第3書 私的建築の種類、古代住宅の由来と形態、邸宅と地域性の関係、旧来の水を引く方法・器械、貯水槽の設備と効果
- 第4書 公共建築、各階級に相応しい建物の種類
- 第5書 宗教建築、修道士の住まい、修道院、学習施設
- 第6書 オーダーの起源・種類・定義、柱装飾と壁面装飾の規制、装飾に関する論駁、古代の比例と尺度
- 第7書 建築材料の生産・性質・準備・用途、石の性質と種類
- 第8書 基礎の種類・用途、旧来の壁製作の手法、橋のヴォールト
- 第9書 完成に向けての様々な仕上げ
- 第10書 改修、美と用を備えた建築への転換

さて、両建築書の内容を通覧すると、これらには共通する部分が数多く見られる。周知のとおりウィトルウィウスは、その建築書を家を建てる術（aedificatio）、日時計を造る術（gnomonice）、器械を造る術（machinatio）の3部門に分類しているが、これはスカモッツィにおいても「建築は（ウィトルウィウスも言うように）aedificatio, gnomonice, machinatio という3つの主要な部門に

分けられる・・・」⁷⁾としている。しかしながら、この建築書の各項目を見る限りでは、スカモッツィにあっては、それら3部門に基づいて建築書を著したとは考え難い。日時計を造る術と器械を造る術については、各章で僅かに取り上げられる程度である。このことは16世紀当時の科学の発展により、日時計を造る術と器械を造る術に関する考え方や手法が変化したことに関係していると考えられるが、いずれにしてもスカモッツィがこの3部門の区分を述べる意図には便宜的な様相を隠せない。むしろ、別の所でスカモッツィが述べる建築に関する基本4要素すなわち *procognitione* (博識と訓練により得ることのできる予見)、*edificazione* (場所や構造や装飾の選択といった建設的手法)、*finimento* (居住を可能にするための諸々の仕上げ)、*restauratione* (古びた建築を美しく快適にするための修復) によって、この建築書は記述されていると見るべきであろう⁸⁾。このことからスカモッツィがウィトルウィウスに大きく依存している部分は、家を建てる術 (*aedificatio*) に関する諸問題であり、それを更に4分化したものがスカモッツィの建築書の形式であると見る事ができるであろう。

このようにウィトルウィウスの意向に従いつつ十全な建築書を制作しようとしたスカモッツィの試みには、時代の要求が考慮され (例えばウィトルウィウスにはない、アルベルティによるものと思われる「改修」の項目が付加され)、家を建てる術 (*aedificatio*) を主体とした建築書が著されたのである。

4. ウィトルウィウスの教義に対する依存と深化

「私は、彼が論じた建築の最も難しく必要に迫られた問題や建築家への要求を確認しながら、あらゆる研究をこれに位置づけていきたいと考えている」と覚書に記されているが、スカモッツィはこれに記される内容、すなわち建築および建築家の哲学的規定を第1書で論じている。この議論は、ウィトルウィウスの教義に従いつつも、しかしながらウィトルウィウスが不明瞭にしていた建築家と職人(技術者)との区別を明確にし、さらにこれを建築の定義に反映させようとした、当時では珍しい議論である⁹⁾。

スカモッツィは建築家の職分を規定するために、ウィトルウィウスの「建築家を公言している人々が真実技術によってでなく、まちがって建築家と呼ばれている」¹⁰⁾ という一節を引用し、同時代の人々の様子を紹介しながら問題を提起している。スカモッツィ曰く「我々の時代には次のような人々が数多く見られる。それは読み書きの術や大いに必要な事物を研究したり観察したりする術を熟知していないにも関わらず、尊い学問に没頭する優れた知性を持つ研究者にこそ相応しいはずの高貴な職業に就いている人々である。こうしたことは、その大部分が卑劣で低級な精神を具えた利益に執着する人々に由来するのである」¹¹⁾。この一節には、当時の人々が、その能力に相応しくない職業に就いていることが示されている。スカモッツィにとって重要なことは、このような悪しき例に含まれないように、建築家と呼ばれる者が、それに相応しい能力を持たなければならないということである。

このように建築家とそうでない者とを区別しなければならない必要性を示したスカモッツィは、

ウィトルウィウスが述べた「建築家の知識は多くの学問と種々の教養によって具備され、この知識の判断によって他の技術によって完成された作品もすべて吟味される。それは制作と理論から成り立つ」¹²⁾ や、「それ故、みずから建築家を公言するものは両方伴（筆者補足：制作と理論）に精通していなければならぬと思われる。こうして、建築家はまた天賦の才能に恵まれていなければならないし、学習にも従順でいなければならぬ」¹³⁾ という一節に基づき、建築家に相応しい能力を身に付けるための内容を列挙する。スカモッツィ曰く「それ故、大いなる道理として我々は建築家に多くの責任を負わせるのである。つまり天賦の才や身に付けた学知によるもの同様、建築物やそれらの各部分、装飾の全種類の理解と認識、そして創造 (invenzione) や素描 (disegno) や形式 (forma) を規定する術などである。(…) さらに作品を組み立てるために経費をしっかりと間違わずに計算したり、材料を考慮したりといった方法を入念に検討する術をも熟知していなければならない。さらにはまた、統率力があり、すべてを良い方向に導き、最後までよく指示のできる棟梁を選ぶ術をも熟知していなければならない…」¹⁴⁾。この一節には、建築家が才能や学識と同様に、様々な建築的方法をも身に付けていなければならないという見解がはっきりと述べられている。

このようにウィトルウィウスの教義に従い建築家の職分を定義したスカモッツィではあるが、さらにウィトルウィウスが不明瞭のままに残していた建築家と職人との関係を明確に区別しようとする議論を展開している。これまで見てきたように、ウィトルウィウスが規定した建築家の職分には広い範疇が設定されており、建築家の知の要素である制作と理論の関係が曖昧な状態にあるが、これはスカモッツィも同様である。このことは、ウィトルウィウスが「技術の可能性についてそれに内在する理論」¹⁵⁾ と述べるように、またスカモッツィも建築家の知識が「原因を通じて、普遍的に、個々に、行為のなかにも」¹⁶⁾ 深く根を下ろしていると述べるように、理論的知識（純粋知）と技術的知識（経験知）とが相即不離の関係にあるからである。

それではスカモッツィは、このような建築家の持つべき理論的知識と技術的知識とのかかわりをどのように判断し、建築家と職人の関係を規定しているのだろうか。ウィトルウィウスは理論的知識の問題を比例の方式において¹⁷⁾、技術的知識の問題を材料や構造や導水などに関する知的な解釈を通じた技術的側面において証明しようと試みているが、一方のスカモッツィは方法論的な解決ではなく、哲学的な観点においてこの2つの知識を執拗に議論していくのである。

スカモッツィは、エレアからの客人と若きソクラテスを対話させ、政治家の知識とそうでない人の知識との相違を証明しようとしたプラトンの次の一節を引用している。「ところがじつは、さらに建築家というものもすべて、この当人自身は自分で手をくだして働く職人ではなくて、職人たちの支配者なのだ」¹⁸⁾。この一節は、国家を運営する政治家のかわりに、より確実な証明を行うために建築家がたてられ、建築家（政治家）の知識の特殊性を示そうとした命題である。そしてこの命題に次のような結論を与えている。計算を専門職とする計算家が判定のみを目的としているのに対して、建築家は判定を行い、かつ「職人たちのめいめに適切な指示を与えながら、指示された仕事が完成するのを見届ける必要がある」¹⁹⁾。したがって建築家の知識と計算家の知識

とは、ともに知ることだけを目的とする純粋な知識であるが、「その一方が判定のみをくだし他方が命令をくださすのだという点で、相互に異なっているのではないか」²⁰⁾。このようにしてプラトンは建築家を命令をくださす知識の所有者として、職人を命令を受ける者として定義づけたのである。このプラトンの命題には職業的人間のあるべき姿、相応しさ、すなわちアイデアの理想形態が示されており、これはスカモッツィにとって最高の示唆を与えてくれるものであったに違いない。スカモッツィはこのプラトンの教義に基づいて建築家と職人との間に境界線を引き、建築家を支配する者、職人を支配される者と定義し、アルベルティの言葉を借りて以下のように述べるのである。スカモッツィ曰く「手法については（アルベルティが言ったように）、建築家が頭の中で構想したものが、のちに実行に移されるよう望まれる際には、職人の手や手段（stromenti）は建築家の道具（stromenti）になる」²¹⁾。

このようにスカモッツィはプラトンの教義に従いながら建築家と職人の職分を区別したわけであるが、さらにプラトンが述べるように「職人たちのめいめに適切な指示を与えながら、指示された仕事が完成するのを見届ける必要がある」わけで、だからこそ純粋な知識を求める建築家は、職人を支配するために技術的知識をも身につけなければならないのである。したがってスカモッツィは、究極的には建築家が「職人としてのみならず哲学者としても」²²⁾ 存在しなければならないという要求を提示し、理論的知識と技術的知識の必要性を建築家に課したのである。先に引用した「それ故、大いなる道理として我々は建築家に多くの責任を負わせるのである」という一節には、こうしたスカモッツィの考えが明確に示されていると言えるであろう。

また、このような建築家への要求は、当然建築の考え方にも反映され、「建築は思索的な学である」²³⁾ や「それ（建築）が道德哲学と共通性があることは明らかである」²⁴⁾ などといった断定的な言葉で表現されることになる。これは明らかにウィトルウィウスとは異なり²⁵⁾、スカモッツィは「哲学者として」建築を規定しようと試みているのである。

こうした傾向のスカモッツィにとって、ギリシャ哲学の反映が見られるウィトルウィウスの6つの基本原理（*Ordinatio, Dispositio, Eurythmia, Symmetria, Decor, Distributio*）は、この上なく有益な論点であったに違いない。スカモッツィは、これまで見てきたような理想的な建築家が如何にして理想的な建築を創造するべきかを述べている。人は神の恩恵によって知性や記憶や意志を与えられ、それらを博識と勤勉さによって洗練していき、良い判断を行えるようになり、そして道理を獲得することができるようになり、この道理によって原因や類似物の認識に到達し、美しい理念（*Idea*）をその知性に住まわすようになった。そして美しい理念によって建築家は素晴らしい創造力（*inventione*）を身に付け、これによって6つの概念が生まれた、このようにスカモッツィは述べているのである²⁶⁾。つまりは、神から導かれる美しい理念（*Idea*）という典型的な新プラトン主義的階梯の論法を採用しながら、理想的な建築家にウィトルウィウスの6つの基本原理を結びつけ、理想的な建築が構築されるという論理を古典的教義から恣意的に導き、自らの建築理論を構築するに至ったのである²⁷⁾。

5. 結

以上、スカモッツィがどのようにウィトルウィウスの建築論を受容していたのか考察してきた。スカモッツィは、青年期のウィトルウィウス研究を通じて「建築の最も難しく必要に迫られた問題や建築家への要求」を見出し、建築に関するあらゆる問題をウィトルウィウスに基づいて研究していく考えを持っていた。この研究で見出された問題は、後に著された『アイデア』の論考に確かに反映されていた。このことは、スカモッツィとウィトルウィウスの建築書の構成内容を比較することによって明らかになるであろうし、『アイデア』の性格を規定する第1書の論点において、建築と建築家の規定に力が注がれていることによっても明白であろう。しかしスカモッツィは、ウィトルウィウスの教義をそのまま受容するのではなく、それに独自の見解をも加えながら深化させていた。ウィトルウィウスの不明瞭な建築家と職人の関係性について、スカモッツィはプラトンの教義を用いて、これらに明確なる区別を規定したのであった。「職人の手や手段は建築家の道具になる」という一節には、支配する者とされる者との定義が明確に示されている。そして支配者たる建築家はまた、職人を扱うために理論的知識（純粹知）のみならず技術的知識（経験知）をも身につけておかなければならないのであった。建築家は「職人としてのみならず哲学者としても」存在しなければならないわけである。このスカモッツィの見解は、建築の定義にも反映され、「建築は思索的な学である」という象徴的な言葉で表された。「如何なる研究をもそれに位置づけていきたい」という思いを抱いた青年期のウィトルウィウス研究以来、スカモッツィの一貫した問題意識には、独自の思想が加えられ、これらが総合されて『アイデア』に反映された。スカモッツィはウィトルウィウスに大きく依存しながらも「建築の最も難しく必要に迫られた問題や建築家への要求」に関するウィトルウィウスの教義を深化させたのである。

このようなスカモッツィの考えには、ある思惑の存在を推察せずにはいられない。ウィトルウィウスの教義を深化させているところを、時代背景を考慮しながら再度見返してみると、そこには建築家と建築を高位に位置づけようとする目論見があったように思われる。「職人の手や手段は建築家の道具になる」という一節とともに「職人としてのみならず哲学者としてもまた」建築家が存在しなければならないという一節には、こうしたスカモッツィの思惑が良く示されている。また、「建築は思索的な学である」や「それ（建築）が道徳哲学と共通性があることは明らかである」という一節には、哲学と同様に建築も学問の分野に含まれるべきであるという意思表示と受け取ることができる。周知のとおり16世紀という時代は、絵画や彫刻など諸芸術間の優劣が盛んに議論され、芸術家と職人との区別が次第に意識され始めた時期にあたるが、こうしたスカモッツィの見解には、この所謂芸術比較論争の渦中であって、建築の地位の確立化を狙ったものと推察される。このような考えが許されるのであれば、この議論は、理論と実践の寓意像が象徴的に表現されている『アイデア』の扉絵も示すように、これは単に伝統的な議論というだけではなく、スカモッツィの建築理論全体を支配する一義的な問題であったとも結論づけることができよう。

註.

- 1) «Vitruvio della nostra età»: Tutte l'Opere d'Architettura di Sebastiano Serlio Bolognese...Et un'Indice Copiosissimo Raccolto per via di Considerationi da M.Gio.Domenico Scamozzi, Venezia, 1584, p.(a 3 r.); Werner Oechslin: "Premesse a una Nuova Lettera dell' Idea della Architettura Universale di Scamozzi," in Vincenzo Scamozzi: L' Idea della Architettura Universale, Centro Internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio, 1997 (Venezia, 1615) , p.XXI 参照。
- 2) ウィトルウィウスがピュテオスを批判している部分は、技術に内在する理論を見抜けなかったこと、すなわち「かれはそれぞれの技術が二つのこと、すなわち実技とその理論、から構成されていることに気が付かなかつた」(第一書、第1章、15, p.19) ことであり、スカモッツィの言っているピュテオスのミネルヴァ神殿についてはウィトルウィウスは正しく評価し、ピュテオスを優れた先人のなかの一人として位置づけている。(第一書、第1章、p.17; 第七書、序、10-12、p.319)。尚、ウィトルウィウスの『建築十書』については森田慶一訳注『ウィトルウィウス建築書』(東海大学古典叢書)、東海大学出版会、昭和44年を参照し、頁の表記もこれに準じる。
- 3) «Laonde Vitruvio al parer nostro non doueua riprender così acerbamente Phitio Phileo»: Vincenzo Scamozzi: L' Idea della Architettura Universale, Centro Internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio, 1997 (Venezia, 1615) , Parte Prima, Lib.Primo, Cap.IX, p.27.
- 5) «Fine sia alla fatica fatta da me Vincenzo Scamozzi vicentino nel leggere Vitruvio, comentato da Monsig. Daniel Barbaro elieto Patriarca d' Aquileja, per la terza volta, con l' avere notato tutte le cose notabili ... E questo principiai li 4 Aprile 1574 sino al di d'oggi li 2 Luglio 1574, il che posso dire la prima volta che io il lessi, haverlo udito, la seconda, la quale fu senza il Comento del Zoppino, haverlo goduto; e la terza che è questa, averlo giudicato: nel che ho conosciuto quanto sia da seguirlo a chi vuole di tal fatica haver meritevol frutto, e così ogni studio voglio in esso porre, trovando che egli ha ragionato di tutte, o almeno le più difficili e bisognevoli parti dell'architettura e bisogno dell'architetto, il che se molti conoscessero, non così facilmente si vanterebbero di essere architetti, che appena sanno quello che gli appartiene. Vincenzo Scamozzi Vicentino.» : Werner Oechslin, op. cit., p.XXIII。この覚書は19世紀の批評家レオポールド・チコニャーラ所蔵のバルバロ版『建築十書』に掲載されている。チコニャーラ曰く「私はヴィンチェンツォ・スカモッツィの長年の研究についての自筆の草稿を所有していた。そこには全てにわたって信じられぬほどの豊かさをもった批判的かつ重要な所見についての手書きの注釈が添えられていた。」: L.Cicognara: Catalogo Ragionato dei Libri d' Arte e di Antichità Posseduti dal Conte Cicognara, vol.I, Pisa, 1821, p.134; W.Oechslin, op.cit., p.XXIII 参照。
- 5) ウィトルウィウスの『建築十書』目次構成については上記訳注書所収の「内容詳細目次」を参照し、この内容をなるべく損なわないように留意し、簡略化した。
- 6) Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.II, p.7.
- 7) «L' Architettura (come dice anco Vitruvio,) si diuide in tre parti principali; cioè aedificatio, gnomonice, & machinatio ...» Ibid.
- 8) このスカモッツィの建築書の性格についてはカルミネ・ジャンナーコも同様の見解を示している。Carmine Jannaco: Barocco e Razionalismo nel Trattato d' Architettura di Vincenzo Scamozzi, Studi Secenteschi II, 1916, p.54.
- 9) 「教養のない人や経験の浅い人または建築の知識はおろか職人仕事の知識すら持ち合わせていない人」(ウィトルウィウス前掲書、第六書、序、p.267) とあるように、ウィトルウィウスは建築家と職人とを区別していたことは理解できるが、これを明確に規定しているようには思われない。また建築家の教養についてウィトルウィウスは、それを強制的に取り上げているように見えるが、「不足を感じない程度に」(同書、第一書、第1章、p.21) という立場をとっている。一方のスカモッツィは本論で示されるように、建築家の学識を強調し「建築は思索的な学である」とまで断言している。このことから、これを論究していくウィトルウィウスとスカモッツィの立場には根本的な相違があると言うことができる。
- 10) 同書、第六書、序章、7、p.269.
- 11) «...all'età nostra sono molti: che si danno à questa così onorevole scienza, come ad alter nobili professioni degne di belli intelletti, e persone di studio; senza saper ben leggere, e scrivere, non che haver studiato, & osservato quelle cose, che le sono grandemente necessarie: e questo avviene, perche la maggior parte d'essi sono genti vili, e d'animo basso, e dati al guadagno...»: Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.XXIII, p.68.
- 12) ウィトルウィウス前掲書、第一書、第1章、1、p.5.
- 13) 同書、第一書、第1章、3、p.7。尚、筆者補足の部分は森田慶一著『ウィトルウィウス研究』(森田慶一評論集4)、彰国社、1957年、p.13参照。
- 14) «E perciò à gran ragione noi habbiamo attribuite all'Architetto tante parti; così per le doti dell'animo, e per le scientie acquistate; come la intelligenza, e cognitione di tutti i generi di edifici, e delle loro parti, & ornamenti, e saper far l'inventioni, e disegni, & ordinar'i loro modelli: per dimostrarli chiari al senso d'ogni uno; mà inoltre dee sapere esaminar diligentemente le forme, che si hanno à fare, e calcular molto bene le spese, e considerar le materie, per la costruzione dell'opera; poi saper eleggere i capi mastri a'quali hà da comandare, e far'incaminare il tutto bene, e con buoni ordini sino al fine...»: Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.XXIII, p.68.
- 15) ウィトルウィウス前掲書、第一書、第1章、17、p.23.
- 16) «...per via delle cause in universale, & in particolare, & anco in atto...»: Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.I, p.6.
- 17) 「理論とは巧みにつくられた作品を比例の方法によって証明し説明しうるものことである。」: ウィトルウィウス前掲書、第一書、第1章、p.5; 森田慶一前掲書、p.14参照。
- 18) Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.XXIV, p.70; Platone: Politico, [259e]. 邦訳は水野有庸訳『ポリテイコス』(プラトン全集3)、岩波書店、1976、p.199参照。

- 19) プラトン前掲書、p.199[259e].
- 20) 同書、p.200[260]
- 21) «...Di maniera (come disse l'Alberti) che volendo poi ridurre in atto, ciò che nell'Idea, s'ha l'Architetto formato, le mani, & i stromenti de gli aetefici divengono stromenti dell'Architetto...»: Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.I, p.6. スカモッツィがアルベルティを参照した部分は次のとおりである。「一体誰を建築家と見なそうとするのか説明すべきであろう。もちろん私は大工を思い浮かべはしない。建築家を君は他の最高の教養の力と対比しているのであり、事実、職人の手は建築家にとって道具でしかない。」相川浩訳『アルベルティ建築論』、中央公論美術出版、昭和57年、p.5 参照。
- 22) «...come artefice, ma come Filosofo...»: Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.VIII, p.24.
- 23) «...l'Architettura sia Scienza speculative...»: Ibid., Parte Prima, Libro Primo, Cap.III, p.11.
- 24) «...onde si vede, che ella tiene della Filosofia Morale...»: Ibid., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.I, p.6.
- 25) ウィトルウィウスは建築論を執筆する上で「わたくしは一流の哲学者または達者な雄弁家あるいはその道の最高理論に習熟した文典学者としてではなく、この文筆の道に染まった一建築家としてこれを書くことに努めた」と述べている。ウィトルウィウス前掲書、第一書、第1章、17、p.23.
- 26) 「偉大なる神の至高の恩恵により、唯一人間にのみ知性や記憶や意志といった能力をそなえた理性的な精神が与えられた。それゆえ博識や教養という手段を用いて実行される研究や勤勉さによって、従順な本来的な人間が絶えず潜在的な能力を洗練していくことができると考えられる。この洗練された素質によって人は良い判断を行うことができ、その判断によって道理を探究することができるようになり、この道理によって原因や同一物の認識に到るのである。こうした法則によって人間は博識になり、最終的には我々の知性に内在する美しい理念が生まれるのである。この美しい理念によって建築家は自らが望む事柄の、素晴らしい創造力や優美な素描力を身につけるのである。そしてこの後に創造力によって各要素の *ordinatione* は導かれる。*dispositione* は *ordinatione* から、*distributione* は *dispositione* から、*corrispondenza* は *distributione* から生まれ、こうして *venustà* は *corrispondenza* から生まれる。そして最後に作品全体の *Decoro* は *venustà* から生まれる。この作品全体は理想的な理念 (*Idea*) において建築家が原理にまで必要条件を持っていたものなのである。」
 «...che per dono singolare della Maestà d'Iddio, all'huomo solo, è concesso l'anima ragionevole con le sue potenze; cioè intelletto, memoria, e volontà; la onde considerando, che dallo studio, e diligenza, che si fa nelle Eruditioni, e Discipline, l'uomo di natura docile, può sempre mai andar raffinando l'ingegno; dallo ingegno raffinato si fa buon giudizio: e dal giudizio, ne viene quella facoltà di ricercar la ragione: e dalla ragione si perviene alla cognitione delle cause, e della cosa medesima; & in cotal modo egli diviene scientiato; onde finalmente ne nasce la bella Idea, che è un'habito nell'intelletto nostro: dalla quale l'Architetto ne cava nobilissime inventioni, e leggiadi i Disegni, delle cose, che si desidera fare.Poi dalle inventioni trahesi l'ordinatione delle parti: e dall'ordinatione dipende la dispositione; dalla dispositione la distributione; dalla distributione la corrispondenza; dalla corrispondenza ne risulta la venustà; e finalmente da questa il Decoro di tutta l' opera; la quale l' Architetto, aveva fino a principio presupposto nella sua Idea di voler fare.» Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib.Primo, Cap.II, p.8. 尚、上記の「Poi dalle inventioni... nella sua Idea di voler fare.」の引用については Carmine Jannaco: Barocco e Razionalismo nel Trattato d'Architettura di Vincenzo Scamozzi(1615), Studi Secenteschi II, 1961, pp.53-54 を参照。
- 27) スカモッツィはウィトルウィウスの6つの基本原理を『イデア』のなかで説明している。スカモッツィの6つの概念 (*ordinatione*, *dispositione*, *distributione*, *corrispondenza*, *venustà*, *decoro*) は、一見ウィトルウィウスの引き写しであるように思われる。しかしスカモッツィが参照したダニエーレ・パールバロ版『建築十書』において、パールバロはウィトルウィウスの6つの基本原理を「難解であるため個人の理解に任せられる」(Barbaro: Vitruvio, I Dieci Libri Dell'Architettura, Venezia, 1567, Libro Primo, Cap.II, p.26) とし、独自の哲学的解釈によって定義付けているため、直ちにスカモッツィの6つの概念がウィトルウィウスの引き写しであるとするわけにはいかない。パールバロは建築の形態を「それ自体 (*in se*)」と「関係性 (*riserita*)」とに識別し、それをさらに各概念の質 (*qualità*) と量 (*quantità*) とに区別している。ここで注意しなければならない点は、ウィトルウィウスにおいて内在的な原理であった *eurythmia* がパールバロにおいては *decoro*, *distributione* とともに「関係性」(もしくは外在)に位置づけられていることである (Ibid., p.27)。こうしたパールバロの美の原理に対する理解がスカモッツィに反映されているのかどうか、慎重に検討する必要があるであろう。

Fig.1) パールバロ注解『建築十書』に認められたウィトルウィウス研究の覚書: in Giangiorgio Zorzi; La Giovinezza di Vincenzo Scamozzi Secondo Nuovi Documenti I, Arte Veneta, Rivista di Storia dell' Arte, X, 1956.

(平成23年3月31日受理)